

研究概要報告書【音楽振興部門】

( / )

研究題目	昭和前期におけるラジオ放送と「日本文化」の形成—音楽番組を中心に	報告書作成者	三枝まり
研究従事者	三枝まり、饗庭裕子、小高根ふみ、佐竹那月、富田信治		
研究目的	<p>昭和前期は、ラジオ放送というメディアによって音楽の大量伝達が可能となり、一方では音楽の大衆化を促すとともに、それまでごく一部のしか聴くことのなかった多種多様な音楽文化の普及拡大に大きく貢献し、ラジオは日本の近代化において画期的な役割を担った。当時にあってはなかなか身近に接する機会の少なかった西洋音楽も、ラジオを通して全国的に受容されるようになった。さらに、戦時下においてはラジオを通して流れる音楽そのものがメディアとしての役割をもって機能し、国策宣伝や教化動員などに活用された。</p> <p>たしかに昭和前期の音楽文化に関する研究が、ここ 10 年ほどの間に進んでいるものの、ラジオ放送の音楽番組については、調査対象となる資料へのアクセスが容易ではないことや、資料としての扱いにくさから、これまでその論及は、概要や部分的なものにとどまり、総合的に分析、考察されることがなかった。</p> <p>そこで本研究は、『洋楽放送記録』が残る 1925(大正 14)年から 1945(昭和 20)年の終戦の年までのラジオの音楽番組を調査し、放送記録一覧を作成し、それを総合的に分析・考察することによって戦前の日本社会において、ラジオがどのように音楽文化の形成に貢献したのかを具体的に解明することを目的とした。同時に、国際交換放送や海外放送も研究の対象とし、海外向けの音楽番組を通して海外に「日本文化」がどのように発信されたのかを考察することもこの研究の目的とした。</p>		

研究概要報告書【音楽振興部門】

( / )

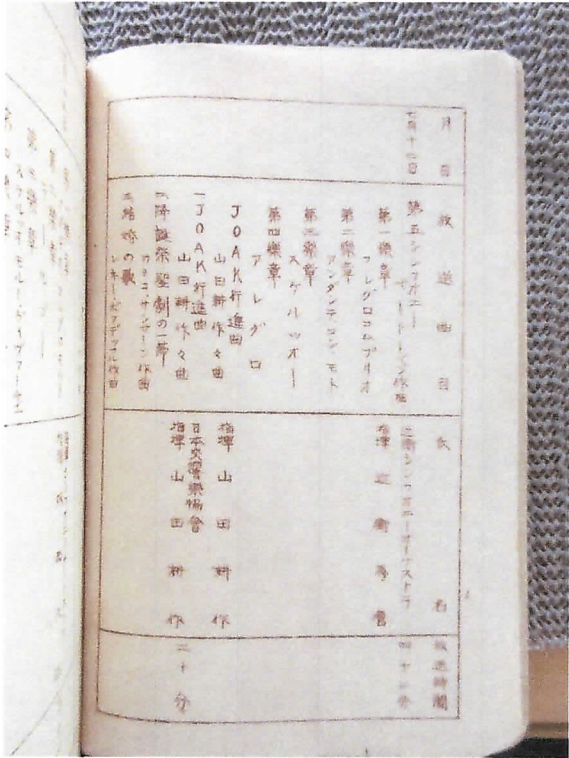
<p>研究内容</p>	<p>「研究のポイント」で述べる(A)～(E)の具体的な内容は以下の通りである。</p> <p>(A)音楽放送について番組名、内容、出演者、放送日時などが記された『洋楽放送記録』を用いて音楽番組の放送の実態を調査した(説明書参照)。手書きの『洋楽放送記録』は、「空襲下取止め」や「(空襲警報発令中ノタメ発令区域外ニミ送出ス)」など、放送直前の変更が反映されている貴重な資料である。対象期間は、『洋楽放送記録』が残る 1925(大正 14)年の放送開始時から 1945 年末のまでとし、放送記録一覧を作成した。なお、『洋楽放送記録』は 1946 年分までであるため、今後その入力および全データの照合と整備を、三枝の産休が明け次第、随時実施していく予定である。</p> <p>(B)『ラジオ年鑑』や雑誌『放送』、『放送研究』、『調査時報』、『第一回 全国ラジオ調査報告』、アナウンス原稿、放送台本、内部資料の『日本放送協会報』などの一次資料を中心に調査した。</p> <p>(C)『業務統計要覧』で種目を確認するとともに、西洋化政策の流れの中にある西洋音楽への志向と、近代化の過程で再発見・認識された日本の伝統的な音楽を結合させ、日本の文化的アイデンティティを形成する過程について、検討した。</p> <p>(D)当局によって創られた「正しい文化」が、どのように生まれ、受容され、戦後に継続するのか、あるいはしなかったのかを検討した(継続中)。聴くことにとどまらず、吹奏楽や合唱、ハーモニカやギター、マンドリン、管弦楽などのアマチュアの演奏家や、「国民歌」に公募したアマチュア作曲家などの音楽愛好家層はどのような広がりを見せたか、音楽コンクールや出版楽譜を中心にこれまで考察の対象とされてこなかった事象にも注目した。</p> <p>(E)および(F)日本放送協会編の『日本放送史』(1951 年、1965 年)、『海外放送番組表』、『海外放送開始以来実施状況 (自)昭 10.6.1 (至)昭 17.4.1 付)東亜放送時刻表』大東亜共栄圏への海外放送局地用として発行された小冊子「ラジオ・トーキョー」、海外向け番組予告雑誌『BROADCASTING IN JAPAN』などを用い、番組聴取率、聴取者の反応を調査した。</p>
-------------	---

研究概要報告書【音楽振興部門】

( / )

<p>研究のポイント</p>	<p>本研究では、これまで国家政策の手段として論じられることが多かったラジオ放送について、西洋音楽だけではなく、大衆音楽も含めて、ラジオが日本の音楽文化の形成にどのような役割を担ったのかを実証的に明らかにした。</p> <p>研究のポイントは以下の5点である。</p> <p>(A)大正末年から昭和20年までに放送された音楽番組の音楽ジャンルおよび作品の調査研究</p> <p>(B)番組の編成方針と番組内容についての調査研究</p> <p>(C)音楽番組における伝統音楽の扱いとその内容の調査研究</p> <p>(D)「国民歌謡」(「ラジオ歌謡」や「みんなのうた」の前身)や合唱コンクールなどラジオを通して行われた活動についての調査研究</p> <p>(E)ラジオの聴取者の嗜好についての調査</p> <p>(F)海外放送、国際交換放送についての調査</p>
<p>研究結果</p>	<p>本研究は、これまでデータとしてはまったく明らかにされてこなかった昭和前期の音楽放送について、放送記録一覧を作成し、全貌を解明することによって、どのような西洋音楽や大衆音楽、伝統音楽等の音楽が広く国民に提供されていたのかを明らかにすることができ、今後の放送音楽研究に大きく寄与することができるだろう。また、本調査によって音楽の種類の詳細も明らかになり、この時代に国民が接した音楽の全体像を知ることができた。さらに、これまで印象や感想によって語られることが多かった戦前の昭和時代の音楽の実態が明らかになり、日本におけるこの時代の音楽研究を刷新することに貢献することができたと考えている。この時代の音楽文化の解明は、戦後の音楽文化の形成の土壌を明らかにするうえでも大きな意味を有する。</p>
<p>今後の課題</p>	<p>ラジオ放送の音楽番組のデータベース化について、『洋楽放送記録』は、記録が残されている番組が限定されている。そのため、『放送番組確定表』を並行して参照したが、この資料は番組の種別に関わらず網羅的に記録されているものの、番組表に記載された情報がそのまま実際に放送された内容とは限らない。今後、東京放送局および大阪放送局の『放送番組確定表』や、その他の放送関係の雑誌や年鑑、業務統計要覧、日本放送協会報、当時放送に関係した人たちの回想録、さらには投書日報やアナウンス原稿、台本なども参照し、事実を慎重に精査しながら研究を進めていく必要がある。</p> <p>また、調査の過程で、国際交換放送および海外放送での音楽番組の実態についても資料調査が進み、今後の研究の課題としたい。</p>

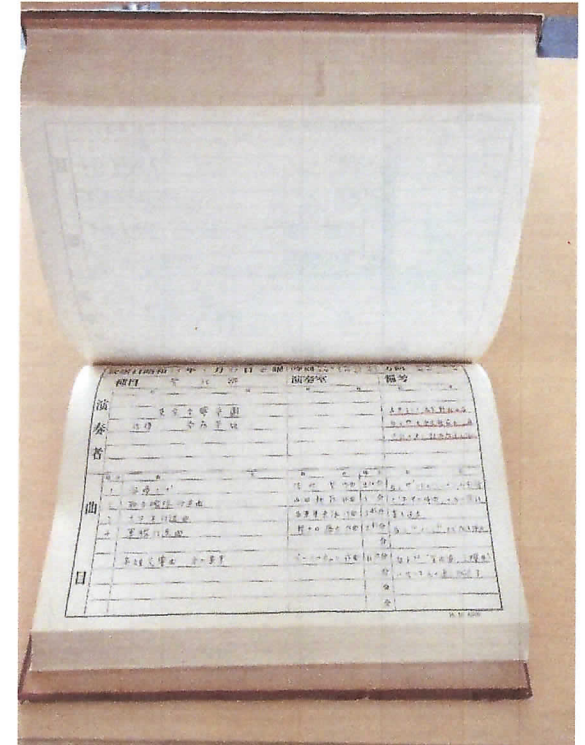




【図1】  
1925年7月12日の放送番組『洋楽 大正十四年七月一十二月』（NHK放送博物館所蔵）



【図2】  
『洋楽放送記録』（NHK放送博物館所蔵）



【図3】  
『洋楽放送記録』（1943年5月21日）より抜粋（NHK放送博物館所蔵）

（注：写真，データ，グラフ等 研究内容の補足説明にご使用下さい。）